九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッド研究の動向

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/1906379

出版情報：アンドレ・ジッド集成 : 月報. 4, pp.4-6, 2017-09-20. 筑摩書房
バージョン：
権利関係：

ジッド研究の動向

吉井亮雄

文学の領域にとどまらず宗教・思想・政治について、そして同性愛にかんしてまで、自身が抱えるさまざまな苦悩に端を発した問題提起を続け、しかもしばしば前言訂正をためらうことのなかったジッドの姿勢は、熱烈な賛同者を獲得すると同時に、多くの論敵・批判者を生んだ。「最重要の同時代人」（アンドレ・ルーヴェール）と彼が評されたのは、そうしたスキャンダラスな受容状況を映してのことであったが、一九五一年の死去後は、実存主義の席巻も相俟って、早くから「煉獄」に留めおかれ、永らく不遇を託つこととなる。

しかしながら本国フランスにおける研究の流れをふり返ってみると、この「同時代人」の死と活動停止こそは本格的な探究をうながす契機となったともいえよう。それまでの批評言説は、少数の例外をのぞけば、なんらかの規定方針にもとづいてなされた断罪あるいは支持・共感の域を出るものではなかったが、作家の没後は次第に、偏見や党派性を排し純粋に美的な見地に立つ研究の必要性が説かれはじめたからである。その結果、主として小説技法の考察を中心にすえた論文・著作があいついで発表されることになる。

一九五〇年代後半から七〇年代にかけて特に盛んであったこの研究方向自体は、現在もなお主要な潮流のひとつとして豊かな成果を生みつづけているが、分析の作業が進むにつれ、ジッドにあっては「生」と「作品」（あえて「テクスト」とは呼ぶまい）が不可分の関係にあるにもかかわらず、その豊饒で多岐にわたる創作活動にたいする実証的解明が大きく立ち後れていることが痛感されはじめる。言うまでもなく、研究者たちが抱いたこの認識は、おりしも隆盛をきわめていた構造主義やヌーヴェル・クリティックが忌避・排撃した伝統的実証主義への郷愁によるものではない。

なるほど、ただ単に自伝的要素を素材として利用したというだけならば、程度の差こそあれ、あらゆる作家にい

えることだろう。だが利用の多寡が問題なのではない。ジッドが固有の地位を主張しうるのは、ある文学的戦略を早くから選択し、以後ゆらぐことなくそれを実践しつづけたからだ。すなわち、自己を禁忌とする逆説的なナルシシズムを育み、これに縛られ導かれて、ついには禁忌と執着とが混淆し、現実と虚構とが分別しがたい自伝空間を生きる、そして行為と書物とが捻れあい織りなす「生」の総体そのものをひとつの「作品」として提示する、という戦略である。

ジッドは青年期からフローベールを愛読していたが、小説美学にかんしてはむしろ対蹠的な信条の持ち主であった――「フローベール流の客観性は人間存在を外面からしか眺めようとせず、存在の深奥に到達することはありません。私の思うに、小説家にとって真の客観性は別様な働き方をするものなのです。小説家が登場人物になりきらないかぎり、描かれるのはその輪郭にしかすぎません」（アンリ・マシス宛未刊書簡）。じっさいジッド作品の主人公たちの多くは彼自身を色濃く投影した存在であるが、しかしまた描き出される「自画像」は不可避的に誇張と歪みとを内包する。ジッドの総体像に迫るとは必然的に、この誇張と歪みを読み解きながら、彼独自の創造的な自伝空間を検証することにほかならない。虚構を現実のパッチワークに貶めるのではなく、両者のあいだの微妙な相関を把握するためにこそ実証的な探究は今なおその有効性を失っていないのである。

こうした考え方に立ち一九八〇年前後からは、先に述べたような研究と並行して、自筆稿や各種刊本の校合による信頼に足る学術版の作成と、膨大な数の書簡（現在までに存在の確認された送受信の総数は三万通を超える）をはじめとする一次資料の公刊が盛んとなった。とりわけ九六年以降、創作や日記、批評、回想録・旅行記などの新たな版が定評あるプレイアッド叢書（全六巻）に順次収められたことの意義は大きい。ここにいたってジッドの著作活動の全容がようやく研究現状を反映するかたちで提示されたのである。爾来、当該コーパスに依拠しつつ、多様な視点から作家と作品を分析・解釈する試みが続けられており、その成果報告の場として国際的なシンポジウムも以前にもまして頻繁に開催されるようになった。

我が国での研究動向にもふれておこう――。山内義雄による『狭き門』全訳（一九二三年）を皮切りに、ジッド

作品は続々と日本語に翻訳・紹介されていった。その結果、三〇年代半ばにはフランス本国に先がけて複数の翻訳全集が公刊され、その後も五〇年代初頭には、当時の精鋭を総動員した邦語版全集が出版されるなど、ジッド受容は異様なまでの活況を呈した。本国の動向も迅速に伝えられ、たとえば作家本人も参加した三五年の討論会記録『アンドレ・ジッドと現代』にいたっては、なんと五カ月後にはすでに邦訳が出ていたほどである。

ところが五〇年代も後半になると、この熱は嘘のように下火となる。それまでの人気が凄まじかっただけに、落差は他のどの国にもまして大きく、「時代遅れ」が作家の通り相場とさえなったのである。だが、今世紀に入るころから明らかに事情は変わってきた。ジッドを専門にえらぶ大学院生がふえ、フランスで博士号を取得する若手研究者も出てきた。喜ばしいかぎりである。小稿筆者としては、プレイアッド新版にもとづき清新な訳を提供する本『集成』がこうしたジッド再評価の流れをさらに推進・加速する契機となることを願ってやまない。